

牛のかたき打ち

これは、1835年（天保6）に起こったホントの話です。

ある日、ちくぜんのある町の市場で、いはら山の炭売りのじいさんが、飼牛からつき殺された。

さあ大へん、たちまち、このことが町や村に広がった。庄屋さんや奉行所の役人がかけつけ、とりしまりが始まった。

「牛のくせに、飼い主をつき殺すとは恩知らずなやつだ。定めによって、かたきをムスコに打たせ、見せしめの死刑にしろ。」

役人が、あっさり牛のかたき打ちを決めた。しかし、ムスコがかたき打ちをことわった。そこで、かわりのツキ役に、いつものごと「おら」のもんが命令された。

牛の死刑の日、市場の真ん中に、新しい2本の赤いヤリが立てられた。牛が足をくいにくくられた。町から村から大勢の見物人が押しかけ、市場は大へんな騒ぎになった。

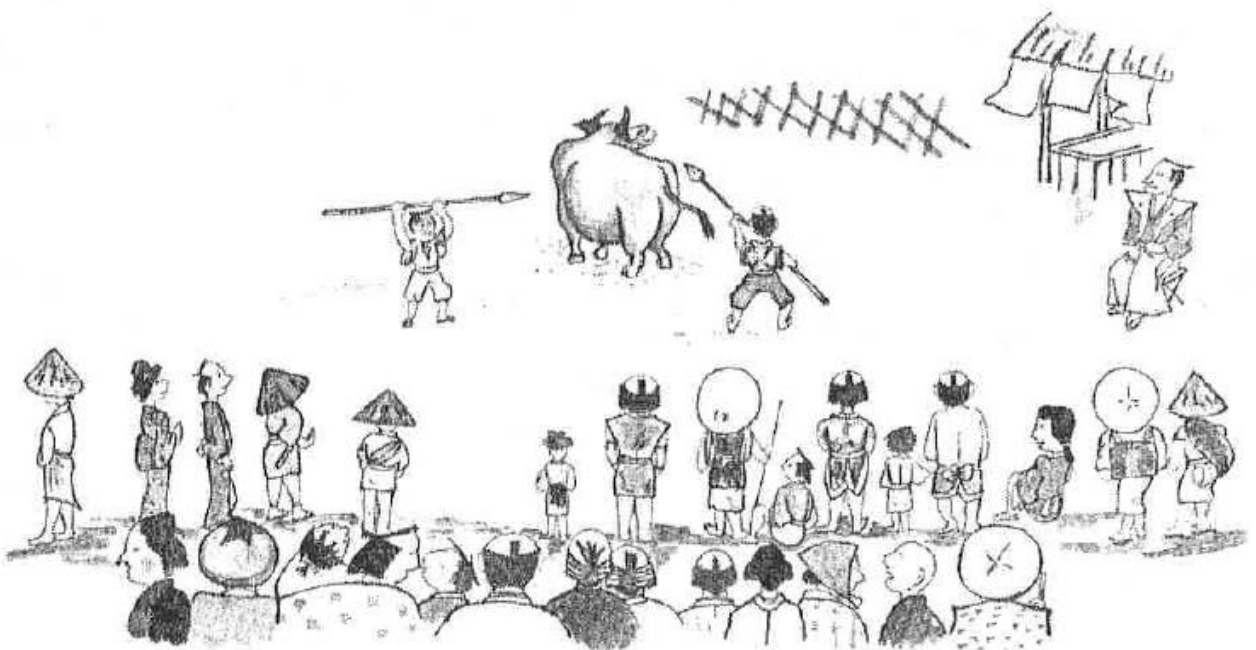
やがて、役人が一段高い台に上がって、ふところから判決文を取り出し、見物人によく聞こえるようにゆっくり読み上げた。

「飼い主の恩を忘れ、角でつき殺すとは不届き至極につき、死罪申しつける。」

役人が大まじめに読み終わると、今度はまわりの見物人がヤリを持ったツキ人になどなった。

「はようつけー 恩知らずな牛は、なぶり殺しにしてしまえ。」

——役人が合図した。



「ツケー ツケー」

——赤いやりが、牛につきささった。

牛がしばられた足をもがいて、大きな声で鳴いた。ツキ人がヤリを取り直して、又、ついた。なかなか死なない。つかれるたびに、牛がはげしく鳴いた。

役人も見物人も、イライラしてきた。

——役人がどなった。

「はよう つきころせー」

——見物人がどなった。

「ハヨウ ツキコロセー」

ツキ人は、歯をくいしばって、一生けんめいについた。ひたいから汗を出して、何べんも何べんもついた。

つかれるたびに、牛が苦しそうな声をあげて鳴いた。

——鳴き声が、小さくなってきた。

牛の鳴き声が小さくなるにつれて、今まで、つけとヤジっていた見物人は、今度は牛の方がかわいそうになってきた。そして、次第に、牛をつくツキ人の方が憎らしくなっていた。

——牛が死んだ

——

あたりが、しーんと静まりかえった。

——見物人の一人がつぶやいた。

——「おらのもんな おごか。あげなこと
せんでもよかろうに . . .」



(松崎武俊作「部落の語り伝え」より)

